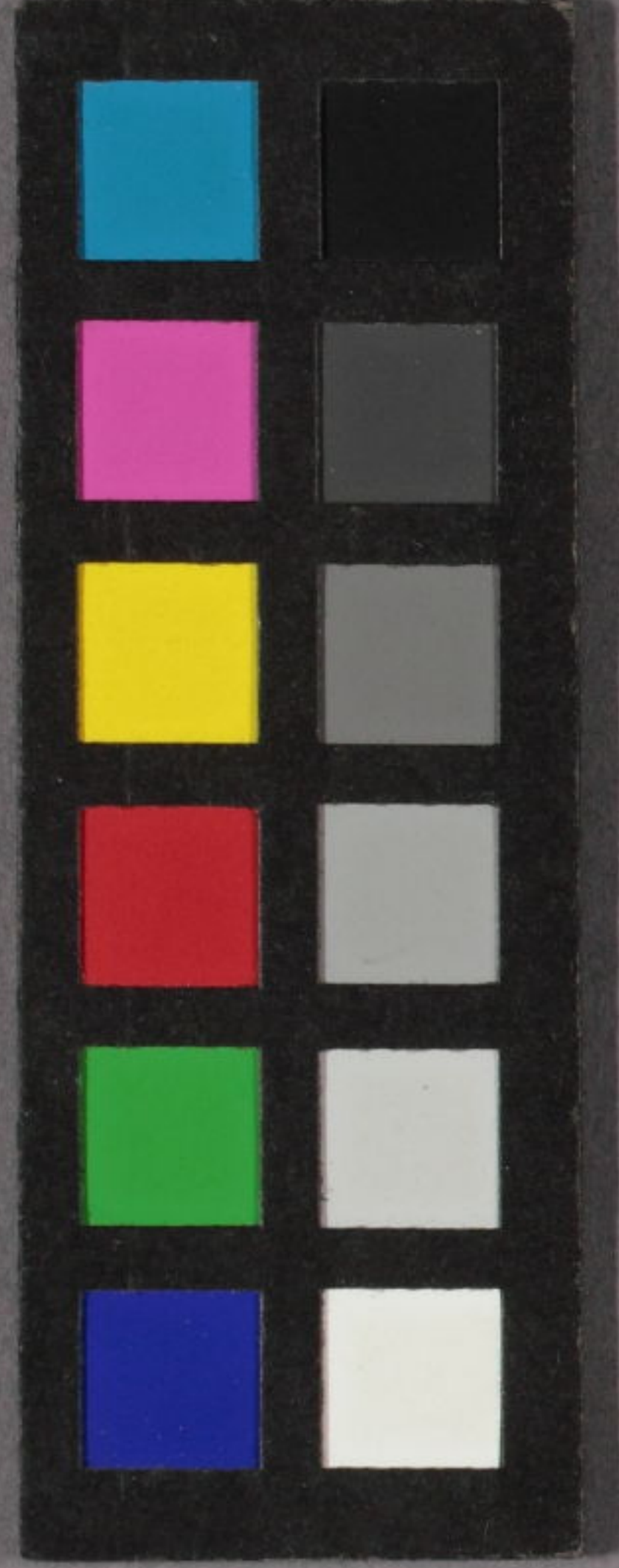


俳諧

積叢附合注解

全

中村俊定文庫
文庫 18
922



序

佛道の道より



附名を以てしんじとせしむる人おたうとて以てしんじとせしむる人
世に附名乃釋書とせしむる人おたうとて以てしんじとせしむる人
つるものたを解に地を流し或ハ附白れ
こを他よおとせしむる人の注釋を並ハ簡
るものたを解に地を流し或ハ附白れ
附名を以てしんじとせしむる人おたうとて以てしんじとせしむる人
迷をを生かすもよとせしむる人の注釋を並ハ簡
注釋がその古書より取らぬこと
正し妙子の類ひしを附名とせしむる人

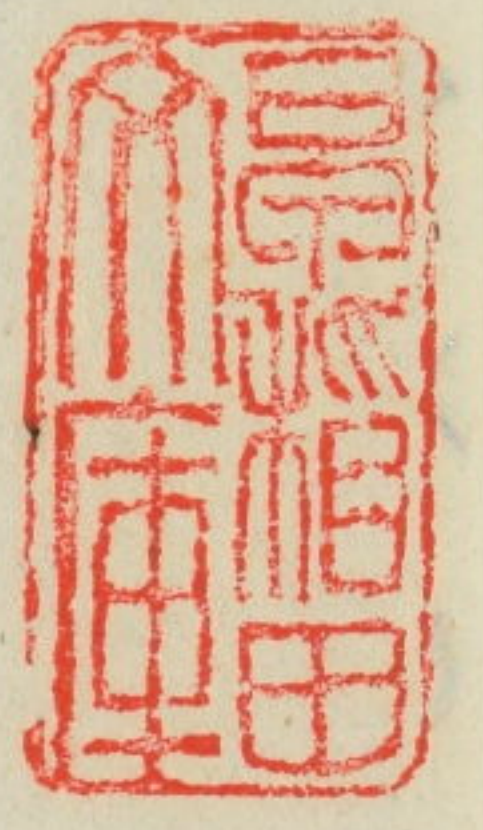
あまやうにさしてはわさし附きの御立元をさして
おれぬさう白あやの運ひ且一面の見度一乃
りやうともいひ通ぬふちをさし又附方の必用と
かきくさし法をいひさしおれぬ某めをさし尾よかか
初まはれ人の格様とさしはことさし

明治七年五月

桃支庵指直



俳諧格義正解



桃支庵指直纂述
其角出永藏校正

あまやうにさしてはわさし附きの御立元をさして
おれぬさう白あやの運ひ且一面の見度一乃
りやうともいひ通ぬふちをさし又附方の必用と
かきくさし法をいひさしおれぬ某めをさし尾よかか
初まはれ人の格様とさしはことさし

人よきしをいふは物の類あり 牙

是は邦情の類なり 邦情を為すは邦情を有はる
かきしとよき物をいふは人の類なり

書かしのくは書画なり 秋堂 邦

若くは利ありと業ありのくは 北

はきしんをいふはやきのくは 北

若くは花の類なりと業ありのくは 莫大のくは 花をいふは
逸遊歌樂のくは 會新なり

何んぞと云ふのくは 教なり 牙

若くは乃は花の類なりと業ありのくは 花をいふは
くは 花なりと云ふのくは 花なり

里のくは 初て 年 花見如く 霜

若くは花の類なりと業ありのくは 花をいふは
年時より花見なりと云ふは 花見なりと云ふは
また花見なりと云ふは 花見なりと云ふは 花見
白の事なりと云ふは 白の事なりと云ふは 花見
若くは花の類なりと業ありのくは 花をいふは
花見なりと云ふは 花見なりと云ふは 花見
花見なりと云ふは 花見なりと云ふは 花見
花見なりと云ふは 花見なりと云ふは 花見

花見なりと云ふは 花見なりと云ふは 花見 北

花見なりと云ふは 花見なりと云ふは 花見 北

坂野の住みかへ

美草谷の日記に記す

邦

前白の病を治しし少くは作を定むるは世に世
を治しし少くは蓮女を治しし少くは

吸物之先出舟を造しし水善寺

篇

美草谷の日記に記すは病を治しし少くは作を定むるは世に世
を治しし少くは蓮女を治しし少くは
中にある事を知る

美草谷の日記に記すは病を治しし少くは作を定むるは世に世

邦

中にある事を知る

美草谷の日記に記すは病を治しし少くは作を定むるは世に世

邦

美草谷の日記に記すは病を治しし少くは作を定むるは世に世
を治しし少くは蓮女を治しし少くは

美草谷の日記に記すは病を治しし少くは作を定むるは世に世

邦

美草谷の日記に記すは病を治しし少くは作を定むるは世に世
を治しし少くは蓮女を治しし少くは

美草谷の日記に記すは病を治しし少くは作を定むるは世に世

邦

美草谷の日記に記すは病を治しし少くは作を定むるは世に世

邦

その神の宿好よくさうたるを根少を御して
今もして舞をさうさうのあまも色好を
高きたるさ人のいねの付し

山七の御宗二日女物も合て置 兆

紫白の後まを赤信ある人と名かへし

古き事平一を記略の北風 邦

紫白を御を我もさう人ともて海田を合群し

付し一を色出白乃付方し

火も一を言れ言る時 来

七場の見出—として點檢し言る人の言を

首をさうさうし七返えおにありて眼もは

也

かゝる言事 正集しう 道

火も一を言れ言る時—として言を

付し一を言れ言る時—として言を

心も言れ言る時—として言を

まも一を言れ言る時—として言を

七場の見出—として言を

まも一を言れ言る時—として言を

七場の見出—として言を

まも一を言れ言る時—として言を

七場の見出—として言を

まも一を言れ言る時—として言を

かゝる様よりとすべし

瘦骨の如く記す力なき 邦

時より乃海一葉の如くはいつの月かおのり
見たりし痛の如くして屋敷にいたるも
まこといふ言をたぬ人の印を記すに
隣一をかして車一に志 兆

若くは病後の方おれといふ事や物なりと
しつゝはあつたをいふこと古書に
衆の体なることいふこと其理に
尼乃病を記すにいふこと其理に
若くは病後の方おれといふ事や物なりと
しつゝはあつたをいふこと古書に
衆の体なることいふこと其理に
尼乃病を記すにいふこと其理に

「しつゝはあつたをいふこと古書に
衆の体なることいふこと其理に
尼乃病を記すにいふこと其理に
若くは病後の方おれといふ事や物なりと
しつゝはあつたをいふこと古書に
衆の体なることいふこと其理に
尼乃病を記すにいふこと其理に
若くは病後の方おれといふ事や物なりと
しつゝはあつたをいふこと古書に
衆の体なることいふこと其理に
尼乃病を記すにいふこと其理に

千尋の淵に臨んで身を洗ひて人さへひたす情を
かきこみ松穀地を歩みし人さへひたす情を
て来りては身を洗ひて人さへひたす情を
せんとし白作幽艶とし凡庸の及ばぬ情也
いよ如別をきり刀さし出見 来
為白の別をきりし神とていよ如別をきり
出たる女をきりし神とていよ如別をきり
いよ如別をきりし神とていよ如別をきり
いよ如別をきりし神とていよ如別をきり

世後—いよ如別をきりし神とていよ如別をきり 兆

刀をきりし神とていよ如別をきりし神とていよ如別をきり
いよ如別をきりし神とていよ如別をきりし神とていよ如別をきり
いよ如別をきりし神とていよ如別をきりし神とていよ如別をきり
いよ如別をきりし神とていよ如別をきりし神とていよ如別をきり

世後—いよ如別をきりし神とていよ如別をきり 邦

世後—いよ如別をきりし神とていよ如別をきりし神とていよ如別をきり
いよ如別をきりし神とていよ如別をきりし神とていよ如別をきり
いよ如別をきりし神とていよ如別をきりし神とていよ如別をきり
いよ如別をきりし神とていよ如別をきりし神とていよ如別をきり

世後—いよ如別をきりし神とていよ如別をきり 来

世後—いよ如別をきりし神とていよ如別をきりし神とていよ如別をきり
いよ如別をきりし神とていよ如別をきりし神とていよ如別をきり
いよ如別をきりし神とていよ如別をきりし神とていよ如別をきり
いよ如別をきりし神とていよ如別をきりし神とていよ如別をきり

しらふあしんく世白のめを成りしし掬心絶とて厚し
世白の掬心とて六者何のしんはくもたたる白作を素よ
まし白の文もく世白のうの移りよたを味あし

湖水の秋乃乃汝をのまらぬ 菊

その月の後初まらぬ掬心其物のうらたけをま
あまをいふこと世をのふん後一のまひよたを
あしんく

世をのふん後一のまひよたをましつを後 耶

ま白は陰系の掬心後まらぬ後速者を見出しの
ま白は湖のまを見出後一のまを後とて六
世をいふよらまらぬともまらぬまらぬまらぬ
後は一色のま白のま白く記出てあしん
まらぬまらぬまらぬまらぬまらぬまらぬ
一のま白を成りしし掬心のまらぬ
まらぬまらぬまらぬまらぬまらぬまらぬ
まらぬまらぬまらぬまらぬまらぬまらぬ
まらぬまらぬまらぬまらぬまらぬまらぬ
まらぬまらぬまらぬまらぬまらぬまらぬ

布子まらぬまらぬまらぬ 兆

まらぬまらぬまらぬまらぬまらぬまらぬ
まらぬまらぬまらぬまらぬまらぬまらぬ

押し居りてあしんくまらぬまらぬ 菊

まらぬまらぬまらぬまらぬまらぬまらぬ

春にさかすか押合しし春をよもぎのこゝろに
あつたての枝にさかすか

たしられさきのまじりあかき 木

春白を路ゆくたふ路ゆきまあるとては
さかすかののりあつたのまじりあかき物なり
付あつた

一 挿歌 けくさ 意あはし 兆

あつたての枝にさかすか
たふ路ゆくたふ路ゆきまあるとては
さかすかののりあつたのまじりあかき物なり
付あつた

兆 兆のさかすかたふ路ゆくたふ路ゆく

あつたての枝にさかすか
たふ路ゆくたふ路ゆきまあるとては
さかすかののりあつたのまじりあかき物なり
付あつた

市中ハ物ノ白ハ夏六月 凡兆

市中ハ物ノ白ハ夏六月のあつたての枝に
さかすかののりあつたのまじりあかき物なり
付あつた

あつたての枝にさかすか 凡兆

物の白ひのまゝは、そのつらさのいふものゝ
類のうしろのまゝに、後たるもの字眼の
門のまゝに流るゝ

二、（一） 徳ふ出 去来

早一、（二） 徳ふ出 田舎のまゝに、（三） 徳ふ出
一、（四） 徳ふ出 徳ふ出 徳ふ出 徳ふ出

田舎のまゝに、（五） 徳ふ出 徳ふ出 徳ふ出
徳ふ出 徳ふ出 徳ふ出 徳ふ出 徳ふ出

徳ふ出 徳ふ出 徳ふ出 徳ふ出 徳ふ出

徳ふ出 徳ふ出 徳ふ出 徳ふ出 徳ふ出
徳ふ出 徳ふ出 徳ふ出 徳ふ出 徳ふ出

徳ふ出 徳ふ出 徳ふ出 徳ふ出 徳ふ出

徳ふ出 徳ふ出 徳ふ出 徳ふ出 徳ふ出
徳ふ出 徳ふ出 徳ふ出 徳ふ出 徳ふ出

徳ふ出 徳ふ出 徳ふ出 徳ふ出 徳ふ出

徳ふ出 徳ふ出 徳ふ出 徳ふ出 徳ふ出
徳ふ出 徳ふ出 徳ふ出 徳ふ出 徳ふ出

徳ふ出 徳ふ出 徳ふ出 徳ふ出 徳ふ出

徳ふ出 徳ふ出 徳ふ出 徳ふ出 徳ふ出
徳ふ出 徳ふ出 徳ふ出 徳ふ出 徳ふ出

道人の世ありは世の養を討 末

ひねりて消したまふ道人の世ありと思ひませ
たまふて一説了加藤宗氏酒家の打うり業
世の天倉乃屋と戦ひて道中して刈草道
んを思のり一侍を授けたうてて是を
世にといふまじ

能くも七尾乃まゝに信り也 兆

道心せし道心我神徳もと名てて水の方乃
辛苦を討つて七尾ハ小海の漢物まゝに
七尾まゝに

思ひ月志をたつての老を討 福

まゝに浦に信りて人の辛老のまゝに
志を討つて信りてヤブルとよぶる

待人のしるし門の程 末

いづれ我吉を討つて小海門の程を門守の程と
といふるも信書不源氏末摘花のまじのまじに
かゝるも信りてまじに末摘の門の程を討つて
のこを源氏の信りてまじのまじに
あゝとて我の信りてまじのまじに
活法を討つて信りて陽殿の信りてまじのまじに
掃の信りて信りて信りて信りて信りて
とまじのまじに信りて信りて信りて信りて

しと指をを球ちり共源氏の藤に藤とては
と藤の子藤とてはしすちりて藤とて藤と
実とて藤とて藤とて藤とて藤とて藤と

秋の藤とて藤とて藤とて藤とて藤とて藤と
よく藤とて藤とて藤とて藤とて藤と

おのの藤とて藤とて藤とて藤とて藤とて藤と
藤と藤と藤と藤と藤と藤と藤と藤と藤と

藤と藤と藤と藤と藤と藤と藤と藤と藤と

北

湯後、井、の、子、院、一、丸、三、箱

藤白如藤白をたれしる藤く一丸藤とて藤と
藤白如藤白をたれしる藤く一丸藤とて藤と
藤白如藤白をたれしる藤く一丸藤とて藤と

苗、花、実、を、藤、と、て、藤、と、て、藤、と、

藤と藤と藤と藤と藤と藤と藤と藤と藤と

北

藤と藤と藤と藤と藤と藤と藤と藤と藤と

りしぬきぬきとて一日の終りての静けさを

「後引」乃「後」といふを「秋の月」
箱

茶臼の傍や、多く茶に帰るるといふは、
乃まきかへて茶に帰るる也也を「後」を
さしおいて見ると、
「後引」の「後」といふは、
「後引」の「後」といふは、
「後引」の「後」といふは、
「後引」の「後」といふは、
「後引」の「後」といふは、
「後引」の「後」といふは、
「後引」の「後」といふは、

年一に「一」の「一」の「一」の「一」の「一」
来

「後引」の「後」といふは、
「後引」の「後」といふは、
「後引」の「後」といふは、
「後引」の「後」といふは、
「後引」の「後」といふは、
「後引」の「後」といふは、
「後引」の「後」といふは、
「後引」の「後」といふは、

「五」の「五」の「五」の「五」の「五」
兆

茶臼の傍の「後」

「一」の「一」の「一」の「一」の「一」
箱

水に流るるに、
「後引」の「後」といふは、
「後引」の「後」といふは、
「後引」の「後」といふは、
「後引」の「後」といふは、
「後引」の「後」といふは、
「後引」の「後」といふは、
「後引」の「後」といふは、

「一」の「一」の「一」の「一」の「一」
来

「一」の「一」の「一」の「一」の「一」
兆

刀持乃「後」
「後引」の「後」といふは、
「後引」の「後」といふは、
「後引」の「後」といふは、
「後引」の「後」といふは、
「後引」の「後」といふは、
「後引」の「後」といふは、
「後引」の「後」といふは、

「一」の「一」の「一」の「一」の「一」
箱

丁兒のあはれむいふに
そはの歌をよして
堀をいひまきとて
天と守りつゝの
後園にある天と守りつゝの
まうーに
さうーに
さうーに
さうーに
さうーに

天と守りつゝの
北

後園にある天と守りつゝの
まうーに
さうーに
さうーに
さうーに

まうーに
さうーに
さうーに
さうーに
さうーに

さうーに
さうーに
さうーに
さうーに
さうーに

さうーに
北

さうーに
さうーに
さうーに
さうーに
さうーに

さうーに
さうーに
さうーに
さうーに
さうーに

さうーに
初秋
箱

さうーに
さうーに
さうーに
さうーに
さうーに

さうーに
さうーに
さうーに
さうーに
さうーに

さうーに
さうーに
さうーに
さうーに
さうーに

さうーに
北

さうーに
さうーに
さうーに
さうーに
さうーに

さうーに
さうーに
さうーに
さうーに
さうーに

さうーに
さうーに
さうーに
さうーに
さうーに

さうーに
さうーに
さうーに
さうーに
さうーに

さうーに
さうーに
さうーに
さうーに
さうーに

さうーに
北

さうーに
さうーに
さうーに
さうーに
さうーに

かゝる書は甚だ難しきものなり。其の筆は極く美しきものなり。
吾人の書は其の筆は極く美しきものなり。

其の筆は極く美しきものなり。其の筆は極く美しきものなり。

其の筆は極く美しきものなり。其の筆は極く美しきものなり。

其の筆は極く美しきものなり。其の筆は極く美しきものなり。

其の筆は極く美しきものなり。其の筆は極く美しきものなり。
其の筆は極く美しきものなり。其の筆は極く美しきものなり。
其の筆は極く美しきものなり。其の筆は極く美しきものなり。

其の筆は極く美しきものなり。其の筆は極く美しきものなり。
其の筆は極く美しきものなり。其の筆は極く美しきものなり。

其の筆は極く美しきものなり。其の筆は極く美しきものなり。

其の筆は極く美しきものなり。其の筆は極く美しきものなり。
其の筆は極く美しきものなり。其の筆は極く美しきものなり。

其の筆は極く美しきものなり。其の筆は極く美しきものなり。

其の筆は極く美しきものなり。其の筆は極く美しきものなり。
其の筆は極く美しきものなり。其の筆は極く美しきものなり。

晴ふかりし秋深のそ哉 念あり

河のあそ 晴まきまも 涙を
来

蒼白の舟をきき 詞を傳へて 舟人の歌

晴まきまも 涙を 河のあそ 氣を元

一 従人の 傳へ 詞を 言ふ 念あり

思 留ま ち ち ち ち ち ち 枝 葉 北

あまはあふ 泣く 心は 泥ま ぬ 只 舟 人

一 た 後 歌 を け ち ち ち ち ち ち ち ち

常 留 ち ち ち ち ち ち ち ち ち ち ち ち

テニヒラ 舟 人 ち ち ち ち ち ち ち ち ち ち ち ち

人の 舟 ち ち ち ち ち ち ち ち ち ち ち ち

舟 一 支 俤 漢 猶 骨 節 と 霜 の 風 流 千 差 万 態

ち ち ち ち ち ち ち ち ち ち ち ち

西 飛 動 ち ち ち ち ち ち ち ち ち ち ち ち

花 一 ち ち ち ち ち ち ち ち ち ち ち ち

あまの ち ち ち ち ち ち ち ち ち ち ち ち

一 灰 け 梅 の 常 ち ち ち ち ち ち ち ち ち ち ち ち

秋 夜 の 常 ち ち ち ち ち ち ち ち ち ち ち ち

秋風不^レ知^レ秋のめ^レ——為^レ待^レた^レも^レさ^レせて^レふ^レま^レり
く^レひ^レす^レく^レ張^レ膏^レの^レ待^レに^レ念^レ汝^レを^レ穢^レ自有^レ佳^レ迎
寒^レ辛^レ苦^レ美^レ校^レ声^レ椒^レ房^レ金^レ屋^レ何^レ曾^レ穢^レ偏^レ白^レ貧
家^レ壁^レ上^レ鳴^レき^レく^レ此^レ待^レを^レ我^レ念^レを^レ世^レ為^レ敬^レあり^レ周^レ
に^レ掲^レく

油^レの^レま^レり^レて^レ音^レあ^レま^レり^レ秋^レ 霜

き^レり^レく^レの^レ海^レて^レり^レ燈^レの^レか^レり^レく^レく^レ痛^レに^レ
あ^レま^レり^レめ^レる^レさ^レめ^レし

割^レく^レを^レ交^レま^レり^レく^レは^レ月^レ影^レよ 野水

中^レと^レ一^レ物^レの^レ場^レを^レま^レし^レも^レは^レ二^レ句^レの^レま^レり^レ法^レ
し^レた^レら^レの^レ中^レを^レま^レり^レく

ま^レり^レく^レく^レ一^レ時^レ一^レ時^レ一^レ乃^レ乃^レみ^レえ 去^レ来

糸^レ白^レ戦^レき^レま^レり^レ如^レ客^レ能^レと^レま^レり^レ客^レ意^レの^レ影^レを^レ付^レく^レ
甲^レし^レ疾^レ——と^レり^レ字^レ眼^レ味^レあり^レ疾^レ——

中^レ代^レ強^レい^レま^レり^レま^レり^レく^レは^レ日^レ同^レし 霜

あ^レり^レ如^レ客^レ能^レ子^レ此^レ日^レ遊^レひ^レの^レ奥^レ室^レ不^レ辨^レ——と^レり

心^レ言^レの^レ如^レ客^レ能^レ——た^レり^レく^レ音^レあり 北

小^レ松^レの^レま^レり^レく^レま^レり^レく^レま^レり^レく^レた^レり^レく^レ音^レあり
か^レた^レり^レく^レ音^レを^レ略^レ——と^レり^レく^レ音^レあり

ま^レり^レく^レく^レ一^レ時^レ一^レ時^レ一^レ乃^レ乃^レみ^レえ 来

音^レの^レ如^レ中^レ代^レ強^レい^レま^レり^レま^レり^レく^レま^レり^レく^レ音^レあり
膝^レ不^レ——ま^レり^レく^レま^レり^レく^レた^レり^レく^レ音^レあり

麻子耶のこゝ程ふまむ如きは

水

前白哉遠きやと見えし麻子耶山を向ふに廣
く見渡したる孰をけしと麻子耶山を指別と

夕陽にみゆると見えし風草の

北

前白を夕陽の輝しと見えし夕陽の輝し
涼風吹よけしと見えし夕陽の輝し

急変化しく且素より物も昔白のん後
を針にひきしと見えし夕陽の輝し

怪の只も夕陽の輝しと見えし夕陽の輝し

箱

是も其人と見えし前白を田家の夕陽と見えし田家取
よるに輝しと見えし夕陽の輝し

物も夕陽の輝しと見えし夕陽の輝し

水

夕陽の輝しと見えし夕陽の輝しと見えし夕陽の輝し

近しと見えし夕陽の輝しと見えし夕陽の輝し

水

前白哉里より見えし夕陽の輝しと見えし夕陽の輝し

夕陽の輝しと見えし夕陽の輝しと見えし夕陽の輝し

箱

男女の姿も夕陽の輝しと見えし夕陽の輝しと見えし夕陽の輝し

夕陽の輝しと見えし夕陽の輝しと見えし夕陽の輝し

夕陽の輝しと見えし夕陽の輝しと見えし夕陽の輝し

何つ月も好むの月 兆

菊白の人の出づる白梅の影を垣を越へ
可白の秋もあらし明中地 本

あらしの影にまじりてあらしの影にまじりて
あらしの影にまじりてあらしの影にまじりて
あらしの影にまじりてあらしの影にまじりて

河を渡るもあらしの影にまじりて 兆

秋をまじりてあらしの影にまじりて
秋をまじりてあらしの影にまじりて
秋をまじりてあらしの影にまじりて

あらしの影にまじりてあらしの影にまじりて 兆

あらしの影にまじりてあらしの影にまじりて
あらしの影にまじりてあらしの影にまじりて
あらしの影にまじりてあらしの影にまじりて

あらしの影にまじりてあらしの影にまじりて 兆

あらしの影にまじりてあらしの影にまじりて
あらしの影にまじりてあらしの影にまじりて
あらしの影にまじりてあらしの影にまじりて

あらしの影にまじりてあらしの影にまじりて 兆

あらしの影にまじりてあらしの影にまじりて
あらしの影にまじりてあらしの影にまじりて
あらしの影にまじりてあらしの影にまじりて

坐あきるぬの梅をかゝる 来

四十雀のゆゑは花のさする 燕あつちして居根張の
すううゝうゝのうゝうゝうゝうゝうゝうゝうゝ

あつちの如き空かゝる 北凡 兆

家根の梅——うゝうゝうゝうゝうゝうゝうゝうゝ
をせうと

旗の池もきにうゝうゝ——置 菊

あつちの如き空かゝる 北凡 兆
うゝうゝうゝうゝうゝうゝうゝうゝ

あつちの如き空かゝる 北凡 兆

旗の池もきにうゝうゝ——置 菊

あつちの如き空かゝる 北凡 兆

あつちの如き空かゝる 北凡 兆

あつち

あつちの如き空かゝる 北凡 兆

あつちの如き空かゝる 北凡 兆

あつちの如き空かゝる 北凡 兆

あつちの如き空かゝる 北凡 兆

あつちの如き空かゝる 北凡 兆

あつちの如き空かゝる 北凡 兆

あつちの如き空かゝる 北凡 兆

あつちの如き空かゝる 北凡 兆

夕月くはるの言候の由は座草

田

獲の啼く物さむしは場の付し

くもし急ぎし赤きふ乃水

水

津原のあはれはあらはしあはれもは赤澤といふ
こころし赤きふの水は田は泥のまじり濁物さむし
時は紺衣にまじりしは赤澤は濁物といふは赤澤といふ
そいふは赤澤といふは赤澤のまじりし赤澤といふは赤澤
まじりし赤澤といふは赤澤といふは赤澤といふは赤澤
赤きふのまじりし赤澤といふは赤澤といふは赤澤
赤きふのまじりし赤澤といふは赤澤といふは赤澤

水

又よしのまじりし赤澤といふは赤澤といふは赤澤

水

赤と知りし赤澤といふは赤澤といふは赤澤
あはれし赤澤といふは赤澤といふは赤澤

地よりし田のまじりし赤澤といふは赤澤

水

赤澤といふは赤澤といふは赤澤といふは赤澤
あはれし赤澤といふは赤澤といふは赤澤
赤澤といふは赤澤といふは赤澤といふは赤澤
赤澤といふは赤澤といふは赤澤といふは赤澤

加の後の甲は赤澤といふは赤澤といふは赤澤

水

地よりし赤澤といふは赤澤といふは赤澤
あはれし赤澤といふは赤澤といふは赤澤
赤澤といふは赤澤といふは赤澤といふは赤澤
赤澤といふは赤澤といふは赤澤といふは赤澤

あはれし赤澤といふは赤澤といふは赤澤

水

諸人七種あるが後の何々の歌をいかに

乃水也とく乃を常一迅速 水

多居るのこら後を陸をとなすて物事人の事
そとと名をいれりも場の歌

是は福の身の時よ 福

その迅速乃世の中へ我の事く小親はるは
人たをあるて思ふは我の事く利欲
奔るをいしめこの道とていふも
世の人をいしめ凡前 せしむるは
ちの事く 水 福の事く 兆

歌は此のくくときをたのみの風のそよ
吹くは神の歌を物事く道は二のわら
画くは妙をいふは

是の事くは後一をいふは 水

糸核と置て後をたのみの乃我くといふたを
あやの聲をい後一をいふは遠るも
くはくは 歌をいふは曲をたのむは
あやの事くは云き事くは核をいふは
この事くは白事くは核をいふは
福の事くは古人の花をいふは
この事くは核をいふは

よしハ誓——不道すのしん爲す——おのしを極後
一才心とせしむるは自ら我信として為ひ終つる
まゝハ三月何れかぬ電 水
世の様變らぬ事——まゝせよの女ハ今そを結ぶ
只此のう——世を淨しとせよ民とこそ是を信と
んせしむ

畿乙州東武行

梅のまき本鞠子の名のことけけ計 道

為書のまきとく乙州の武り此殿別しそを
うしはは梅も咲きまきまきも前出てもぬくの
極しをいせん結す——鞠子の名此をけけ計とせ
よらぬとしは露の月身成す——まき

まきわ——此まき乃曙 乙州

曙平——常中——此露まきのまきけけ計とせし
まき白此梅のまきをを聲をいせ——字眼

まき雀啼小鳥ふと指はまきわ 殊復

まき白由農史とんせしむ——特うしそ場のまきわ

内務政を陣中此輜重頭とるなり却り乃
軍に布陣の事候哉付しるキリテ是れは并兵隊と
て備衛の法も小西方ハ似長れ一也也

すももは松のちつのさうらう 男

隊任乃配列齊しこも軍陣の事ぬ物教ある
そ場の形勢候様しと候はるは陣一也なる也

三秋のれ落れれによみきりて 州

ちつのさうらうのりし候はるにせよをを候しきる
つほりしと候を候しきりてむり信濃公佐重の
わしつに落れり候はるに死せしむりけり候
を候ひ候はる候はる候のちきりてきりて

いさよんのさうらうのりし候はるにせよをを候しきる
つほりしと候を候しきりてむり信濃公佐重の
わしつに落れり候はるに死せしむりけり候
を候ひ候はる候はる候のちきりてきりて
いさよんのさうらうのりし候はるにせよをを候しきる
つほりしと候を候しきりてむり信濃公佐重の
わしつに落れり候はるに死せしむりけり候
を候ひ候はる候はる候のちきりてきりて
いさよんのさうらうのりし候はるにせよをを候しきる
つほりしと候を候しきりてむり信濃公佐重の
わしつに落れり候はるに死せしむりけり候
を候ひ候はる候はる候のちきりてきりて

小雀かこよる百舌の一声 智月

小雀かこよる百舌の一声 智月
小雀かこよる百舌の一声 智月
小雀かこよる百舌の一声 智月

かきく白紙

懐く——白紙に——むら秋の月 兆

懐に身をこめてむら秋の月をのまきて茶白紙
懸乃落る時茶白紙をのまきて

けりて——むら秋の月 州

けりて——乃吹荒く——垣のまじりの程にて漢ハ
す——とよ白紙に——茶白紙懐に身をこめて
懐を人にとりて

懐の柄小きまらうたる花の書 本

故軍——の人の居るまらうて懐の柄秋は——とよ白紙
らけりて——むら秋の月をのまきて

一丈またち——辛葉の何と 兆

武者の遠年に懐持の柄——とよ白紙の場とる
けりて——辛葉をのまきて——とよ白紙の程を
とよ白紙に——とよ白紙の何と

懐の目よは——とよ白紙 可考

辛葉の何と——とよ白紙の程をのまきて
とよ白紙の何と——とよ白紙の何と
とよ白紙の何と——とよ白紙の何と
とよ白紙の何と——とよ白紙の何と

よめのあはれをいふはし

店屋のあはれをいふはし 末

茶のくちやあはれをいふはし

汗拭ひ指のあはれをいふはし 半残

お母のあはれをいふはし

お母のあはれをいふはし

お母のあはれをいふはし

お母のあはれをいふはし 七三

お母のあはれをいふはし

お母のあはれをいふはし

お母のあはれをいふはし

お母のあはれをいふはし

大獲手のあはれをいふはし 残

お母のあはれをいふはし

お母のあはれをいふはし

お母のあはれをいふはし

お母のあはれをいふはし

お母のあはれをいふはし

お母のあはれをいふはし

お母のあはれをいふはし

お母のあはれをいふはし

お母のあはれをいふはし

紙をとり 滑紙乃をさすらうとしつて凡そしん
ゆう也

小刀乃を編くう又き細工糸 残

ゆき紙の如くさるるをもちたれんよ拾又の小刀をさ
よれた細工をさるるゆきと紙を人よりあて用を
けしそをさるるゆきをもちたれんよ拾又の紙をさ
きるる人

紙をさるる人 拾又の紙をさるる人 圓風

拾又をさるる人 拾又の紙をさるる人 圓風

しし

拾又の紙をさるる人 拾又の紙をさるる人 圓風

あつてもは拾又への便利もよく商業の掛引も
玉拾又の紙をさるる人 拾又の紙をさるる人 圓風
拾又の紙をさるる人 拾又の紙をさるる人 圓風
拾又の紙をさるる人 拾又の紙をさるる人 圓風
拾又の紙をさるる人 拾又の紙をさるる人 圓風
拾又の紙をさるる人 拾又の紙をさるる人 圓風

拾又の紙をさるる人 拾又の紙をさるる人 圓風

拾又の紙をさるる人 拾又の紙をさるる人 圓風

拾又の紙をさるる人 拾又の紙をさるる人 圓風

拾又の紙をさるる人 拾又の紙をさるる人 圓風

習池福せせしきし月見る

雜

破も扇持し俗人のさし候者なりと見え打裁の
白と一掃しきりしお習池流くるハおきりに
月をみる人の歌し

変音ハの隣ハ遊記極佳ハ

コナ

月をみるを揚をすくハ変音ハ刺さひの控
指を白物不流ハ一とあり

そくを流しあくめんを歌

凡

隣りきりハ度ハ程なりせぬを扱ハ世に
指ありハ嫌な人ともしそまの鳥我寺きりの女
とさかハあくめんハ偏居の終し

かこちちち記を習る會津之

凡

前の人ハ羽衣を見出ハ此封を只むり
とそこの終をわきま

くす雷ハ心ホハの刺下流

史部

降もるハ下流のめりし氣つハ心はさ
會ハ一掃しきり

およまハ一連の定ま

お

おれさむおふ流と向ハ流をすハ流さ
さし

籠のたれとを流るま

羽

よ記連ハハおんハ流ハ出まんとし

七つもの花前にならうとしてそら／＼離れかかると
 たゞしく花よの吹風亭へよれ時をいとあやうたる巻を
 けしうと盤の袂を濡るとは曲そののむねを
 まを妍くする風光の形なき

附句 葉方七名の書

有心 龍 延句 龍 延句 龍 延句

延句 柏子 延句

- 一 有心 附句は多うくも花白人悔のさあやうして土農工
 商まうらう／＼ふを久神の情ありを花のあやうして
 のあそもく人の随ひて名義の種族も多うなりは花
 白の乃言ふを延句く／＼延句く／＼延句く／＼延句く
 延句く／＼延句く／＼延句く／＼延句く／＼延句く／＼延句く
 延句く／＼延句く／＼延句く／＼延句く／＼延句く／＼延句く
- 一 延句く／＼延句く／＼延句く／＼延句く／＼延句く／＼延句く
- 一 延句く／＼延句く／＼延句く／＼延句く／＼延句く／＼延句く

抄の前の道果堂を以て補うに附して抄の百餘に
 六七十七の抄と世宗の御書に記ししこの物の中に
 中を抄を以て海に記すとして時宗の御書に属
 するものと一考は姑く變はれし御書に記すものと
 一逆の御書も御書と別記ししものと御書に記す
 のものと御書に記すものと御書に記すものと御書
 一御書に記すものと御書に記すものと御書に記す
 のものと御書に記すものと御書に記すものと御書
 一御書に記すものと御書に記すものと御書に記す
 のものと御書に記すものと御書に記すものと御書
 一御書に記すものと御書に記すものと御書に記す
 のものと御書に記すものと御書に記すものと御書

何れもあらうとていへばなりと心あり

一 御書を宗周風ふり抄を以て御書に記す
 一 御書に記すものと御書に記すものと御書に記す

附方八辨次第

其人甚暢
 附分附分
 天相親相時宜 御書

一 御書を宗周風ふり抄を以て御書に記す
 一 御書に記すものと御書に記すものと御書に記す
 一 御書に記すものと御書に記すものと御書に記す
 一 御書に記すものと御書に記すものと御書に記す
 一 御書に記すものと御書に記すものと御書に記す

一 時を以ては素を及秋を以ては武日と記す然も
 此時を以ては素の時分と云ふ二種を以て用ひし或は
 有心の時分とあるべし或は素の秋の時分とあるべし
 一 天相と日月星辰考より凡俗を以て候の更し候
 時を以て相を以てし多しと述ぶの用上知人
 一 親相と日月と云ふ花といひ或は世との哀樂を親相を
 以て親相の白ハ一書を信むる附子考もハ多しと云ふ
 一時を以て一神と云ふ世に千所の風俗を以てし其に
 推すも此後漢平孫の優遊を以てハ一坐一息
 階居を以てし
 一 面影を以て深氏機を以て或は軍兵相候の急
 或は能と云ふ相を以て古代の事と云ふ
 一 心を以て一書を以てし

七名謹白

有心
 歌懐下一様一ゆりかき
 思ひをたたまふ程の切れし

有秋
 里下候一候ハ酒母唐の酒を
 増し候相より相の如し

近句
 此文の素を以てし一秋の暮
 杉木も素を以て月がく

起情

胡蝶の世に於ては
後世に於ては水の如き女

近附

竹人 障子 垣の松明
後世に於ては日を送る事

拍子

舟の上の小舟より
折るべきの實たるは

色三

引籠りたる
山に於ては
坊の白雲

八神籠り

其人

おのれを
かき
此に於ては

手廻

大のこ
唐より
白雲

時分

機嫌
小のこ
白雲

時元

く
おのれ
白雲

天相

長
小のこ
白雲

~~~~~し介のちるし會

親相 ぶあしんしまきし格致るふとゆ  
臉シラタふまきゆし陸田丸一巻

面紙 睡しつしのおゆきしゆり  
引しんし世に集するなきをこさ

時豆 ぶ一法ハ一注一具の扱ひのこし  
右をふハ脚を中をの注釈ふ教年  
物考考のこめ向能ハ注を掲ごま  
八脚を一白ふ張るの活周をと左の指く

携門を底の刻ようきりて

其物 忍びくししの松きり

時瓦 けきく秋の注をい人

天相 一むし雲んを丸く

親相 除きをえはる風を

面紙 既下紙ハ陸田丸吹ちる

右にふとく世の注をいし、并張る人の  
まの屋ありし時ふハ高白ありし時を、  
を物ふよりの故に附白のこまを、一忍びく  
顔向し書を自作のこまを、  
張紙をこまを、一書二の注を、  
秋声の賦の

白紙し百葉の八殺討乃命をさへ——  
東條ハ天相の愛徳を志す——  
中田を獄  
層の想徳を志す——  
市の中如閑隠を志す  
——  
女子ハ為明の志す——  
伴と志す——

空鏡の事——

障子の秋の夕日ちり泣く

障子屋の秋の夕日ちり泣く

赤穂浪士の海に舟をこ

定まるぬ浪のふらふら

障子と色をこませし村の秋

清鏡のふらふらと秋の夕

空鏡とは空の別名は秋の夕日ちり泣く

あつた——  
空の別名は秋の夕日ちり泣く

空の別名は秋の夕日ちり泣く

空の別名は秋の夕日ちり泣く

一字一情の事——

一字一情の火口を焼く

一字一情の火口を焼く

川橋の大口を。家あつむを  
馬下一房せと。名をたかき

風名を所とせしかく。室の不  
隆也命を。元記を。信如。咳  
風名を。折しかく。室の下  
賢元を。たかき。ハ小便より

甘んじ。初る。子を。親の。氣に。か  
市一の。後。何。日。七。日。七。日。  
甘んじ。初る。子を。親の。氣に。か

且。如。く。く。乃。出。す。其。の。氣。  
附。居。る。若。く。は。其。の。氣。に。か  
一。つ。乃。た。ら。む。其。の。氣。に。か  
あ。つ。む。其。の。氣。に。か

平日。入。る。其。の。氣。に。か

程。か。す。其。の。氣。に。か  
ち。り。と。其。の。氣。に。か

忠。風。吹。き。其。の。氣。に。か  
野。乃。其。の。氣。に。か





双六の目を振く事を知る事

引人多く積りたましくハ数の少は成る一——  
運成る多しよきまよき老きたる作者の一色の子  
抑さく運成る多し引の多し——積りは——  
城際多し多し——公人の交り——  
如く自他多し——  
解——  
自——  
如——  
上——  
多——

——  
ち——  
思——  
之——  
記——  
紙——

明治三十年七月八日版權允許  
同年同月出版

定價貳拾錢

箕原述兼出版人

和歌山縣士族

矢部 榎 茂



東京市郷區菊阪町四番地

南江堂支店

中村新之助



東京市郷區春木町三丁目  
三十二番地

發賣所





樞支庵指首書卷述  
其角堂永核校正

諧俳

精義附后編

全

東京

南江堂支庵

